

コロナ禍でキューバの良さを知ろう

写真にあるように、昨年11月、精神科医の同僚10人とキューバを訪問しました。当地の精神医療の実態を知るためです。トランプ大統領の経済封鎖のため、日本からの送金は全く不可能で、各自ホテル代など現金持参での入国でした。

キューバは、成人した国民の8～9割が公務員で、税金はありません。学費と医療費も無料です。成人になると住居が支給されます。学校は通常の勉強をする普通学校と、美術学校、音楽学校、スポーツ学校の4つがあり、どの子どもそのうちのどれかを選ぶので、不登校などありません。成績上位の子は大学院まで行け、外国留学もできます。キューバの美術と音楽、スポーツが世界的に有名なのはそのためです。

医療費がすべて国家負担なので、国が力を入れているのは予防です。医学部教育は特に充実し、南米諸国からの留学生を多数受け入れています。自国の医師を、医療が遅れている国々に輸出をしているのも、キューバの特長でしょう。このコロナ禍でも、多数の医師団を派遣しています。外国で働くキューバの医師は、報酬の一部を母国に送金するのです。キューバ出身の野球選手も同様です。

道路掃除をする人も公務員である反面、レストランや音楽ホールのオーナーは私的な経営者であり、収益の多く(最大8～9割)を税金として国に納めます。こういう施策なので、ひきこもりとも無縁です。資源はニッケル、産物もオリーブにミカン、コーヒー、タバコぐらいしかないキューバで、どうしてこうした公平な政策が可能なのでしょう。首相ですら並の公務員の3倍程度の給料だからです。精神科病院の中に巨大な野球場があり、地域住民も患者さんもそこでプレーします。院内に職員と患者さんの楽団もありました。歓迎のための患者さんによる劇が終わったあとは、一緒にサルサを踊られました。精神科医の大半は女性で、聞くと国会議員の53%は女性だそうです。

こうした格差のない国造りができたのも、カストロやチェ・ゲバラによる建国の理念が今なお生きているからでしょう。

そんな国を愛したのがジョン・レノンでした。公園のベンチに腰かけていたので、すぐ傍で写真を撮らせてもらったのです。



島本達生